

春 東京 祭 東京・春・音楽祭 2026

SPRING FESTIVAL IN TOKYO

酒井健治：Echoes／Encore

「Echoes」と「Encore」は、もともと管弦楽のための作品として書かれた。前者（2007/08）は、酒井が芥川作曲賞を受賞した出世作で、後者（2018）は、読売日本交響楽団の創立 55 周年記念委嘱作品として作曲され、同楽団の欧州ツアーナで披露された。そして今回演奏される 2 つのチェロのための「Echoes／Encore」は、オーケストラ版を再構成した作品で、2019 年 11 月にハクジュホールで向山佳絵子と長谷部一郎により初演された。

福富秀夫：ふたつのチェロのための音楽「風にそよぐ光のように」

ふたつのチェロのための音楽「風にそよぐ光のように」は、2 本のチェロが織りなす繊細な響きと叙情的な旋律が魅力の作品。単一楽章で構成され、光が風に揺らめくような描写的なアルペジオや、2 本のチェロが対話するように織りなす叙情的なメロディを聴くことができる。

ブリテン：無伴奏チェロ組曲（全 3 曲）

「無伴奏チェロ組曲 第 1 番」（1964）は、ロストロポーヴィチとの運命的な出会いから 4 年後に書かれた。ブリテンはバッハの無伴奏組曲を深く研究し、その形式や対位法に敬意を払いながら、まったく新しい 20 世紀の無伴奏チェロ組曲を構想した。全 9 楽章からなるが、「カント（Canto=歌）」と題された 4 つの短い旋律的な楽章が「フーガ」「哀歌」「セレナータ」「行進曲」といった性格の異なる楽章をつなぎ合わせる「支柱」の役割を果たす。「Canto primo（第 1 の歌）」は、作品全体の核となる、瞑想的で柔らかな導入部。続く「Fuga」では、バッハへのオマージュとも言える、高度な対位法が駆使される。「Lamento（哀歌）」は、深い悲しみを湛えた抒情的な楽章。「Canto secondo（第 2 の歌）」を挟んで、「Serenata（セレナータ）」は、ピチカートが基調をなす、軽妙な小品。「Marcia（行進曲）」は、諧謔的かつリズミカルな楽章。さらに「Canto terzo（第 3 の歌）」を経て、「Bordone（ボルドーネ）」では、持続的な低音に乗って、ユニークな楽想が展開される。そして最後の「Moto perpetuo e canto quarto（無窮動と第 4 の歌）」では、銃弾のようなパッセージが続いたあと、「Canto primo（第 1 の歌）」が変容・回帰して、曲を閉じる。

「無伴奏チェロ組曲 第 2 番」（1967）は、第 1 番よりもさらに表現が掘り下げられ、壮大な音のドラマが描き出される。第 1 番がバッハ風「組曲」の再構築であったとすれば、本曲は「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第 2 番」を強く意識した作品となっている。全 5 楽章構成であるが、中心は終楽章の「Ciaccona（シャコンヌ）」に置かれている。冒頭の「Declamato（朗誦）」は、朗々とした語り口で開始される。続く「Fuga」では、より現代的な対位法が用いられ、第 3 楽章「Scherzo」は、急速で攻撃的な性格を持つ。そして静かで思索的な「Andante lento」を経て、終曲の「Ciaccona」に至り、執拗に繰り返される低音の主題（シャコンヌの定型）を土台として、技巧的かつ雄弁な変奏が繰り広げられる。

「無伴奏チェロ組曲 第 3 番」（1971）は、3 曲の中で最もドラマティックな背景を持っている。作曲当時、ロストロポーヴィチは反体制派の作家ソルジェニーツィンを擁護し、自宅に匿ったことでソ連当局から激しい圧力を受け、演奏活動を厳しく制限されていた。そこでブリテンは、苦境にあった友人への共感と連帯の証として本作を作曲し、ソ連のロストロポーヴィチに密かに楽譜を届けた。しかしブリテンは初演を聴くことなく、1976 年にこの世を去った。結局、初演はブリテンの死の翌年、ロストロポーヴィチにより行なわれた。全 9 楽章が切れ目なく演奏されるが、最大の聴きどころは、終楽章（パッサカラ）において、ロストロポーヴィチの祖国ロシアへの敬意を込めて、ブリテンが 3 つのロシア民謡とロシア正教の聖歌「コンタキオン（死者のためのキリエ）」を引用している点。本作は困難な時代を生きた二人の芸術家の魂の対話であり、その友情が昇華した傑作と言える。